

多角的な観点によるワケダ・ハズダ・コトニナルの比較研究

陳 秀茵*

1. はじめに

日本語教育において、ワケダ・ハズダ・コトニナルはいずれも初中級段階で導入されるが、日本語学習者にとって理解レベルにおいても産出レベルにおいても難しい文法項目であると考えられている(市川, 1991)。また、ワケダ・ハズダ・コトニナルの三者を並べて比較している研究は極めて少なく、管見のところ、横田(2002)のみ見られる。その理由の一つは、体系的性が低いからだと考えられる。ワケダ・ハズダ・コトニナルは形式名詞(わけ・はず・こと)より由来し、ある筋道や道理に沿って考えていくと、もう一つの事柄にたどり着く用法(以下、「帰結用法」と称する)を持つ点において共通している(例えば、(1)と(2))。一方、それぞれの表現には置き換えられない、独自の意味機能も持っている(例えば、(3)～(5))。

(1) イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時 なワケダ／なハズダ／
というコトニナル。 (グループ・ジャマシイ, 1998)

(2) 今ここで働いている工員は約千人だが、この工場は一日三交代制だから、実際にはもっとおおよ
ぜいの工員がいる ワケダ／ハズダ／コトニナル。 (森田・松木, 1989)

(3) 私は古本屋めぐりが好きで、暇があると古本屋を回っては掘り出し物を探しているわけです
が、このごろはいい古本屋が少なくなってきたので残念に思っています。

(グループ・ジャマシイ, 1998)

(4) (山田さんはどこに住んでいるのかと聞かれて) 山田さんは八王子に住んでいたはずです。

(岡部, 1998)

(5) 来月、結婚することになった。

(作例)

体系的が高い文法項目は数多く研究されているが、上記のような独自の意味を持ち、体系的性が低いと思われるものは研究が遅れている傾向があると指摘されている(野田編, 2005)。上記の背景を踏まえ、本稿は上級レベル学習者、特にニア・ネイティブレベルを目指す日本語学習者のための記述を

* 人間科学総合研究所研究員・東洋大学国際教育センター

目指し、「帰結用法を表す形式名詞由来の文末表現」という新たな視点より、ワケダ・ハズダ・コトニナルを捉え直す。さらに、「意味用法」「使用実態」「日本語教科書における扱い」という多角的な観点より、三者の相違について分析と考察を行う。

2. 本稿におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法

まず、ワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法を示す。本稿では、筆者の研究と先行研究の分類に準じて、ワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法を、【表1】～【表3】のように規定する。

【表1】 本稿におけるワケダの意味用法の分類（陳，2017：38）

①帰結	a 結果	既定の事実Pから推論すれば当然Qになるということを表す。
	b 原因・理由	「P。Qわけだ」の形で、QがPの原因・理由であるということを表す。
②納得		最初にQを認知し、その原因・理由となる情報Pを自分で発見したり、相手の発話から聞いたりして、納得する気持ちを表している。
③言い換え		事実Pをあげ、その事実は、別の視点から見るとQという意味、意義がある、ということを開き手に気づかせようとする。
④事実の主張		P→Qという推論の過程は示さず、Qということ、自分がただ主観的にそう言っているのではなく、ある確かな根拠があつての立言なのだということを言外に匂わすとする。

陳（2017）はワケダの意味用法を大きく「①帰結」「②納得」「③言い換え」「④事実の主張」の四種に分けている。「①帰結」用法については、「既定の事実Pから推論する時、必ずその結果を推論するとは限らず、『理由』を推論する可能性も考えられる」ため、「①帰結」用法をさらに「a 結果」と「b 原因・理由」用法に二分した。また、「①帰結」用法と「②納得」用法の相違点については、最初に結果となる事柄を認知し、その原因や背景が新しく得られたことによって、その事柄の成立を改めて納得するものを、「②納得」用法としている。

【表2】 本稿におけるハズダの意味用法の分類（陳，2021：147）

		1 推論有り	2 推論なし
A 現実が未知		A 1	A 2
現実が既知	B 反事実	B 1	B 2
	C 納得	C 1	

陳（2021）はハズダの基本的な意味を、「論理や既存知識に基づいて考えた結果得られた確信を示す」と捉えている。そして、「現実との関係」と「推論の有無」という二つの観点に基づいて分類を行っている。なお、C2が存在しないのは、現実が既知で理由・原因となる情報が新しく得られ、「なるほど」と悟る場合、「推論なし」のハズダが用いられないからである。

【表3】 本稿におけるコトニナルの意味用法の分類（鈴木，2017）

A	A 1	A-1-1 予定の決定	Pを（将来）真とすることが（何者かによって）決定される。
		A-1-2 規則・きまりごと	規則、きまりごとにおいてPが真であるべきだとされる。「ことにされている」とは言い換えが可能である。
		A-1-3 特定領域での事態認定	他者の認識や記録・記憶などある特定の領域においてPが（事実とは関係なく）真である。
	A 2	A-2-1 論理的帰結	ある論理的な筋道にしたがえば「P」が真である。
		A-2-2 ある視点からの事態把握	ある物の見方で「P」が真であると言うことができる。
A-3 主体意図を離れた事実化	現実世界における他者認識や世の中の判断として、「P」が（事実がどうであるかとはいったん離れて）真である。		
B 事実の展開		「なる」以前には成立していなかった事態Pが「なった」時点で成立することを表す。	

コトニナルについては、【表3】のとおりである。鈴木（2017）ではまず大きくAタイプとBタイプに二分され、Aタイプは「直接に現実世界での真を主張するのではなく、（他者の認識や記録・記憶などの）ある特定領域における『P』の真を主張する」ものであるのに対して、「Bタイプでは『Pことになる』と言うことと『P』と言うこととの間に本質的な違いは無い」とされている。

上記の分類に従い、3節では三者の意味用法における相違について、4節では使用実態における相違について、5節では日本語教科書における三者の扱いの相違について比較する。

3. ワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法の相違について

ワケダ・ハズダ・コトニナルの三者を並べて比較している研究は極めて少なく、管見のところ、横田（2002）のみ見られる。横田（2002）は学習者にとってワケダ・ハズダ・コトニナルの使い分けが難しいということを問題提起し、横田（2001）で分類したワケダの用法に照らして、どのような場合のワケダがハズダやコトニナルと言い換えられるのかを検討している。ワケダがつく節を仮にAとして、Aが話し手にとって未知かどうか、未確認であるかどうかなどの観点から比較し、三者の相違を【表4】のようにまとめている。

【表4】 ワケダ・ハズダ・コトニナルの比較（横田，2002：23）

	A	ワケダ	ハズダ	コトニナル
疑問形		○	×	○
①結果を表す帰結用法	未知	○	○	○
	既知	○	×	× (○)
	未確認過去	○	○	×
②原因・理由を表す帰結用法	既知	○	×	×
	未確認	○	× (○)	×
③納得用法		○	○	×

④捉え直し用法		○	× (○)	○
⑤派生用法		○	× (○)	× (○)

*ワケダの用法と意味がほとんど変わらず、ハズダやコトニナルと言い換えが可能な場合には○をつけ、不可能な場合は×をつけた。ただし、置き換えるとほかの意味になる場合は(○)で表示する。

【表4】からわかるように、三者において「帰結用法」のほか、二者間にのみ共通している意味用法もある。次項以降は(6)～(8)の三点より、他の先行研究を踏まえ、横田(2002)を再検討する。そうすることによって、ワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法を比較する。

(6) ワケダ・ハズダ・コトニナルの「結果を表す帰結用法」

(7) ワケダ・ハズダの「納得用法」

(8) ワケダ・コトニナルの「言い換え用法」

3.1 ワケダ・ハズダ・コトニナルにおける「結果を表す帰結用法」

横田(2002)は三者の共通点について、次のように指摘している。

(9) ワケダもハズダもコトニナルも、基本的用法は、ワケダ・ハズダ・コトニナルのついた節は話し手がある事柄から論理的に考えた末に出てきた必然的な帰結であることを表明するものである。(p. 13)

ワケダ・ハズダ・コトニナルは同じように帰結を表しているが、三者の相違点として「焦点の当て方」「主観性と客観性」の面における違いを挙げることができるとされている。その二つの観点から論じている他の先行研究も簡単に紹介する。

まず、「焦点の当て方」の相違についてである。寺村(1984: 277)は、ワケダとハズダの相違点について、「Qハズダ」は、Qが未知で、その事実性が問われていることが引き金となっているのに対し、「Qワケダ」では、Qは事実としては既定のことであるが、その事実がどうしてそうなのか、という問いに対して答えようとする心理が引き金になっていると主張している。森田・松木(1989)は、ワケダは「前提からの論理的帰結を示して断定する表現である」(p. 203)のに対し、ハズダは「未知の帰結を推論する表現」(p. 203)であり、「時間的・場所的隔たりや知識の不十分さなどから真実のところはわからないが、話し手の知る諸事実から推論すると当然の帰結として間違いなくこうであると判断する表現である」(p. 255)と述べている。以上の相違について、横田(2002)では「断定と推論」に関する違いであるとまとめられ、次のように指摘されている。

(10) ワケダとコトニナルは論理的帰結を少なくとも論理上は既定の事実であるとして断定しているのに対して、ハズダは論理的帰結を高い確信をもって推論しているだけで事実としては捉えていない点に異なっている。(p. 13)

次に、「主観性と客観性」の相違について考える。寺村(1984)は「『Qワケダ』は、前提Pからの論理的帰結としてQであることを言う点で、『Qコトニナル』と共通するところがあり、未知のQ

を推理する『Qハズダ』よりも、『Qコトニナル』との互換の可能性が高い。しかし、その主観性という面で、ワケダはハズダとムードの助動詞としての共通する特徴をもつ」と主張している(p. 283)。このような「主観性と客観性」の観点については、森田・松木(1989)にも指摘が見られた。森田・松木(1989: 203)では、ワケダ・ハズダの「どちらも主観的判断ではあるが、『はずだ』のほうが話し手の主観をより色濃く反映する。したがって『はずだ』は、何らかの客観的事実をもとにしているとはいえ、あくまでも自分の推論ではそうなるというニュアンスが強く、予測実現への期待感や相手も同意させようとする気持ちを伴うことが多い」とされている。さらに、コトニナルについては、「既成の事実や成り行き、道理などから必然的にある結論が導き出されることを表す。『わけだ』との言い換えが可能だが、『わけだ』と違って主観的な要素が少なく、前提から必然的帰結へと推論そのものを非常に客観的に述べる表現である」(森田・松木 1989)と述べられている。横田(2002)は以上の2つの先行研究をまとめた上で、次のように結論づけている。

- (11) ワケダは帰結の必然性を主観的に断定する表現、ハズダは帰結の必然性を推論する主観的表現、コトニナルは帰結の必然性を客観的に述べる表現である。(p. 15)

さらに、泉原(2007)では、ワケダは「断言」の表現なので、話し手が自分自身の状況を含めて、自分を取り巻く状況のすべてを判断することができるのに対し、ハズダは「状況判断」なので、〈話し手／聞き手〉の状況ではなく、第三者の状況か、第三者と見なした〈話し手／聞き手〉の状況しか判断できないと主張されている。

本稿はワケダ・ハズダ・コトニナルの相違について、基本的に横田(2002)で主張されている(10)と(11)に賛意を表すが、付け加えたい点もある。詳細は以下、コーパスの例を挙げながら説明する。【表4】によると、A(寺村1984では「P」としている)が「未知」の場合、ワケダ・ハズダ・コトニナルの用法がほとんど置き換えられる。例えば、(12)～(14)である。

- (12) イギリスとは時差が8時間あるから、日本が11時ならイギリスは3時 {○なワケダ／○なハズダ／○というコトニナル}。 (1) 再掲

- (13) 今日は天気がいいし季節もいいから行楽地はどこも混んでいる {○ワケダ／○ハズダ／○コトニナル}。 (岡部, 1998)

- (14) 今ここで働いている工員は約千人だが、この工場は一日三交代制だから、実際にはもっともおぜいの工員がいる {○ワケダ／○ハズダ／○コトニナル}。 (2) 再掲

上記の三例において、ワケダ・ハズダ・コトニナルのいずれも自然であるが、ニュアンスが少し異なる。ワケダは話し手が論理的に考えた帰結であり、ハズダは確信度が高い論理的推量であり、コトニナルは論理の結果を客観的に述べる表現になる(横田, 2002)。また、【表4】では、(15)のようにAが「既知」の場合、ハズダは使用できないとされている。それは事実としてすでに確認している事柄については推量の余地がないためである。一方、「コトニナルは使用できるが、それは『捉え直し用法』になる」(横田, 2002)。

- (15) 体重を計ったら52キロになっていた。先週は49キロだったから、一週間で3キロも太って

しまった {○ワケダ/×ハズダ/○コトニナル}。 (横田, 2002)

ハズダに関しては、(15)では確かに不自然であり、横田(2002)の主張には特に問題がないと考える。ただし、コトニナルについては、本稿では(15)のようなコトニナルを「捉え直し用法」と見なさず、(12)、(13)と同じように結果を表す帰結用法に分類したほうがよいと考える。それは、論理的な筋道に従えば(今週52キロ-先週49キロ)、「一週間で3キロも太ってしまった」ことが真であると認定されるからである。そのようなコトニナルを表す例としては、(16)が挙げられる。

(16) 第十七回参院通常選挙の投票率は全国平均で選挙区四四.五二%、比例代表四四.五〇%と国政選挙では史上最低だった。半分以上の有権者が棄権した {○ワケダ/×ハズダ/○コトニナル}。 (安達, 1997)

また、ハズダについても付け加えたい点の一つがある。それは、現実と一致しない場合に用いるハズダは、ワケダに置き換えると、意味機能が異なると感じられることである。前掲の(12)~(14)のいずれも、現実が未知な場合であり、ワケダ・ハズダ・コトニナルのいずれを用いても自然である。それに対して、(17)のような現実が既知、かつ推論がある場合(つまり、B1)は、ワケダを用いることはできるが¹、帰結用法ではなく、「事実の主張」用法と読み取れる。話し手の認識が現実と一致しないことで不満のニュアンスが生じると考えられる。

(17) ウイーンの女性はきれいだけど、街が女性を美しく見せている部分もあるのよ。日本だって街がもう少し素敵なら、わたし達だって少しはましになる {○ワケダ/○ハズダ/○コトニナル}よ。 (BCCWJ、文学、渡辺淳一『ひとひらの雪』、1983、文藝春秋)

最後に、横田(2002)によれば、(18)のように、Aが未確認過去の場合に、過去のことであっても話し手が事実として把握していない未確認のものであれば、推量できるため、ハズダが使える。それに対して、コトニナルは「結果を表す帰結用法」の過去の事実には使えないと主張されているが、コトニナルについては検討を要するのではないかと考える。例えば、(18)ではコトニナルを用いてもそれほど違和感を覚えないのではないだろうか。また、(19)のような例が挙げられている。

(18) 時差が四時間あるから、日本時間のちょうど正午について {○ワケダ/○ハズダ/○コトニナル}。 (横田, 2002)

(19) 彼の話を利用すれば、彼は出張中だったのだから、そのとき東京にはいなかった {○ワケダ/○ハズダ/○コトニナル}。 (友松他, 2010)

(19)は、Aが未知であり、過去の事実にもコトニナルが用いられている。新しく得られた情報に基づいて、発話時現在に改めて過去の事実について推論し、コトニナルを用いて結果を表すという用法である。その場合、コトニナルのダブルテンスは「タ形-ル形」になっており、実際にはそれほど多く使われていないものの、用例は出現している(陳, 2018: 125)。

以上のように、本稿ではワケダ・ハズダ・コトニナルの帰結用法について、基本的に横田(2002)

¹ 文体上、この場合は「わけだよ」ではなく、「わけよ」のほうが自然である。

の観点に同意する。つまり、ワケダとコトニナルは論理的帰結を少なくとも論理上は既定の事実であるとして断定しているのに対して、ハズダは論理的帰結を高い確信を持って推論しているだけで事実としては捉えていない点、ワケダは帰結の必然性を主観的に断定する表現、ハズダは帰結の必然性を推論する主観的表現、コトニナルは帰結の必然性を客観的に述べる表現である点に相違が見られる。なお、【表4】に同意できない点もある。それについて、3.2、3.3で詳しく考察し、新しい表（【表5】）を提示する。

3.2 ワケダ・ハズダの「納得」用法

ワケダとハズダの納得用法については、いくつかの先行研究で言及されている。例えば、寺村（1984）は「こういう意味のハズダはワケダと言い換えることができる。この用法の場合は、必ず前後にPが現れている。あるいはそれが対話者に理解されているという状況がある。そうでないと、先に見てきたような、ある事実があるから、その当然の結果として、Qだと自分は考える、という意味に解釈される」（pp. 271-272）と述べている。森田・松木（1989）ではそれほど詳しい記述がないが、他の先行研究と異なる指摘が見られた。「この用法の場合、『わけだ』と言い換えても意味が変わらないが、(20) (21) のように指示詞『その』を受ける場合は『そのわけである』などとなって不自然である。なお、『はずだ』の場合も『その』以外の指示詞を受けることはできない」（p. 204）。本稿では述語に接続する句末のハズダに分析対象を限っており、「そのはず」は名詞修飾用法であるため、研究対象としない。「そのわけ」も同様に、除外した。（下記の2例は森田・松木（1989）より）

(20) 私もおそらくこういう（おれは大丈夫だという）人の気分で、比較的平気にしていられるのだろう。それもそのはずである。死ぬまではだれしも生きているのだから。

(21) 民子は死ぬのが本望だといったが、そういったか……家の母があんなに身を責めて泣かれるのも、そのはずであった。

また、日本語記述文法研究会（2003）は「…『どうりで』と共起することも多い。この納得の『わけだ』は、原則として、『はずだ』と置き換えることができる。納得の『わけだ』『はずだ』は、『わけです』『はずです』『わけ』『はず』という形はとりやすく、『わけだ』『はずだ』の形を取るのが普通である」（p. 212）と記述している。ただし、陳（2021）によると、このような「どうりで」と共起する用例は多くなく、そして「わけです」「はずです」の例も少ないものの出現しているということであり、日本語記述文法研究会（2003）と異なる結果が指摘されている。

このように、納得用法を表す場合、(22) (23) のように、ワケダをハズダに置き換えてもほとんど意味が変わらないと主張している先行研究が多いが、横田（2002）は(24) (25) のような用例においては、ワケダをハズダに言い換えにくいと指摘している（(22) ~ (25) はグループ・ジャマシイ（1998）の例を加筆したものである）。

(22) A：彼女は3年もアフリカにフィールドワークに行っていたそうですよ。

B：そうですか。道理で日本の状況がよくわかっていない {○わけです/○はずです} ね。

(23) あ、鍵が違うじゃないか。なんだ。これじゃ、いくらがんばっても開かない {○ワケダ/○ハズダ}。

(24) A：山本さん、結婚したらしいですよ。

B：ああ、そうだったんですか。それで最近いつもきげんがいい {○ワケダ/×ハズダ}な。

(25) A：隣の鈴木さん、退職したらしいよ。

B：そうか。だから平日の昼間でも家にいる {○ワケダ/×ハズダ}。

例 (22) ~ (25) におけるワケダは、いずれも「納得用法」を表しているが、なぜハズダに置き換えられたり、置き換えられなかったりするのだろうか。それは、その前文脈に現れたハズダと共に用いられている表現に関係するのではないかと、横田 (2002) は主張している。「『それで』や『だから』がある場合、『それで』や『だから』が結果を導き出す言葉であるだけに、『納得用法』の流れ Y → X → Y 中の特に X → Y の部分が強調され、その結果、ワケダの用法としては「結果を表す帰結用法」と同じ機能を担うことになるのではないだろうか。そして、結果を表す帰結用法においては、推量の可能性のない既定の事実についてはハズダが使えないから、(略) 話し手が事実として既に確認している事柄についてはハズダが使えないのではないだろうか」(p. 21)。

泉原 (2007: 966-967) でも横田 (2002) と似た見解が述べられており、ワケダがハズダに置き換えられない場合について、次のように主張している。(26) の場合、聞き手の言葉「あの、風邪だった」を受けて、話し手が過去「あの人が来ていなかったこと」を振り返って、「あの、風邪だった」の後に「それで/だから」を続けて「100% 納得」したことを表している。しかし、この場合、納得のハズダが使えないのは、話し手が100%の納得を表し、「風邪だった」ことと「来ていなかった」こととの断定的な因果関係を示す「それで/だから」の存在があるからである。つまり、「それで/だから~はずだ」は「納得」用法を表すことができないとされている。

(26) あの、風邪でしたか (↓)。それで/だから、来なかった {○わけだ/×はずだ} ね。もちろん、ほかの理由で「来なかった」のかもしれないが。

→あの、風邪でしたか (↓)。△だから/×それで、来なかったはずですね。もちろん、ほかの理由で「来たかもしれません」が。

しかし、BCCWJでは、(27) (28) のような「それで…はずだ」の用例が少数ながら出現している。この場合は納得用法ではなく、帰結用法を表していると思われる。

(27) そこで次の対応策は、相手に気をつかわず、こちらもマイペースで考えたり行動すること。たぶんそれでそんなに問題は起きないはずだし、もし文句をいわれたら、「あれ？ お互いさまだと思いますけど」のように切り返し、相手に否応なく気づかせる絶好のチャンスである。

(文学以外 (社会科学), 中川昌彦『困った上司』とつき合う法』, 1998, 文香社)

(28) ところがボンベイの町のなかを歩いて、人のおおさ、とくに夜でも道ばたで寝ている人のおおいこと、スラムのにおい、もうほんとに歩けないくらいでした。道ばたで、やせたおとなか子どもかわからないような人たちから、お金をせびられたりしたときには、もうほんとう

え直し」では、ある見方、ある立場に立つとき「P」ということになる、「P」ということが言えるという意味を表すのであって、そこに論理的な筋道のようなものがあるわけではない。論理的な筋道があるわけではないが、ある見方、ある立場からは「必然的」に「P」という把握が得られるという意味はあると考えられる。(p. 5)

ワケダとコトニナルの「言い換え」用法について言及した先行研究はほとんどない。横田(2002)においても、「捉え直し」用法を表すワケダはコトニナルに置き換えられるという記述にとどまっている。先行研究の例をもう一度見てみよう。((34)～(36)はグループ・ジャマシイ1998より、(37)、(38)は鈴木2017より)

(34) A: この間書いた小説、文学賞がもらえたよ。

B: あなたもようやく実力が認められた {○わけ/○ことになる} ね。

(35) A: 田中くん、富士山登山に行くのやめるんだって。帰った次の日がゼミの発表だから準備しなくちゃいけないらしいよ。

B: ふうん。要するに体力に自信がない {○わけ/○ことになる} ね。

(36) 彼は大学へ行っても部室でギターの練習ばかりしている。要するに講義にはほとんど出ていない {○わけだ/○ことになる} が、それでもなぜか単位はきちんと取れている。

(37) この本を旅行案内書として見れば、情報不足の役に立たない本である {○ことになる/○わけだ} が、文学作品として見れば、また別の評価ができる。

(38) 効率性から言えば、その方法はずいぶん時間と材料を無駄遣いしている {○ことになる/○わけだ}。

(39) 彼の考えが正しければ私の発言は間違っていた {○ことになる/○わけだ} し、私の発言が正しかったのだとすれば彼の考えが間違っている {○ことになる/○わけだ}。

ワケダは「事実の主張」を表すことができ、コトニナルは「事実の展開」が表せるが、両者を置き換えることはできない。そのため、場合によって、「事実の主張」用法のニュアンスが付帯する例はコトニナルより、ワケダのほうが自然だと感じられる(例えば、(37))。一方、(39)のように、事態の展開を表しているようにも読み取れる例では、ワケダよりコトニナルのほうが自然である。

以上の結果を表示すると、【表5】になる。(【表4】と異なる部分を別表記する)。

【表5】 ワケダ・ハズダ・コトニナルの比較

	A	ワケダ	ハズダ	コトニナル
①結果を表す帰結用法	未知	○	○	○
	既知	○	×	●
	未確認過去	○	○	●
②納得用法		○	○	×
③言い換え用法		○	×	○

*ワケダの用法と意味がほとんど変わらず、ハズダやコトニナルと言い換えが可能な場合には○をつけ、不可能な場合は×をつけた。

【表1】【表2】【表3】のように、それぞれ異なる観点と立場から、ワケダ・ハズダ・コトニナルの意味用法を分類することができるが、【表5】のような類似点と相違点が考えられる。以下、コーパスの用例を用いて、3節で考察した、三者の意味用法の理論的な相違を、使用実態の面から検討する。三者が実際どのように日本語母語話者に使い分けられているのか、どの用法が最も多く使われているのかなどを調査と分析を行う。

4. ワケダ・ハズダ・コトニナルの使用実態の相違について

この節では、上記で得られた理論的な相違点を、話し言葉コーパスと書き言葉コーパスを用いて、使用実態の観点から検討し、ワケダ・ハズダ・コトニナルを比較してみる。

4.1 話し言葉におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの使用実態の相違について

本稿では、下記の三種のデータを用いて、話し言葉におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの使用実態を調査し、その結果を【表6】にまとめた。

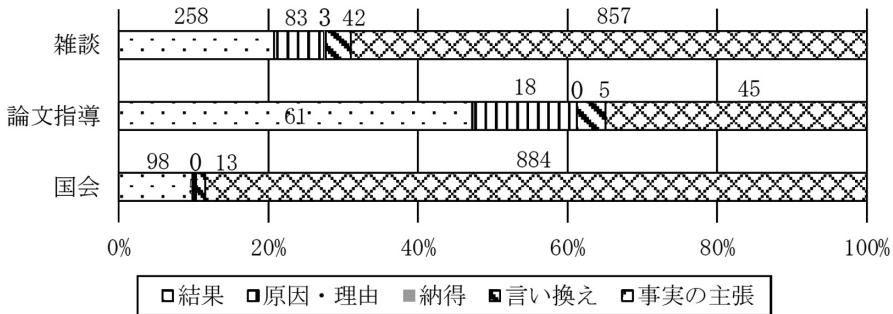
- (A) 『名大会話コーパス』(以下「名大」)
- (B) 『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版』(以下「BTSJ」)
- (C) 『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)の「国会会議録」』(以下「国会」)

【表6】 「名大」「BTSJ」「国会」におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの出現状況

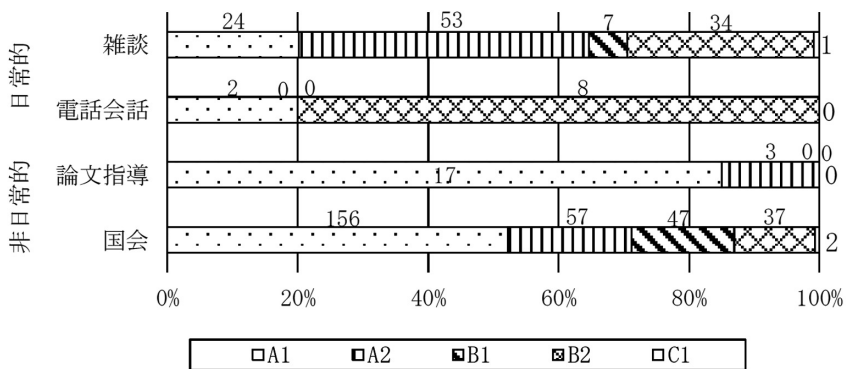
		ワケダ	ハズダ	コトニナル
「名大」		1,046	95	100
「BTSJ」	雑談	197	25	53
	論文指導	129	20	15
	電話会話	16	10	9
「国会」		22,127	394	3,877

【表6】のように、「名大」と「BTSJ」の「雑談」において、ワケダが最も多く使われている。「論文指導」においても、ワケダはハズダとコトニナルより5倍以上多く出現している。「国会」においては、ワケダが圧倒的に多く、ハズダの約56倍、コトニナルの約6倍である。三者の意味用法別の出現状況を、【表1】～【表3】の分類に照らし合わせした。結果を次の【図1】～【図4】に示す。

「雑談」と「国会」では「④事実の主張」用法が最も多く使われるのに対して、「論文指導」では「①a結果」用法が最も多く現れた。劉(1996)、横田(2001)などの先行研究によると、一番多く用いられる用法である「①a結果」用法は、「論文指導」においては五割ほどを占めているが、「雑談」と「国会」ではそれぞれ20.8%と9.8%にすぎなかった。また、グループ・ジャマシイ(1998)で対話型専用とする「②納得」用法は「国会」「論文指導」では1例も現れず、「雑談」でも0.2%にす



【図1】 話し言葉におけるワケダの意味用法の出現状況



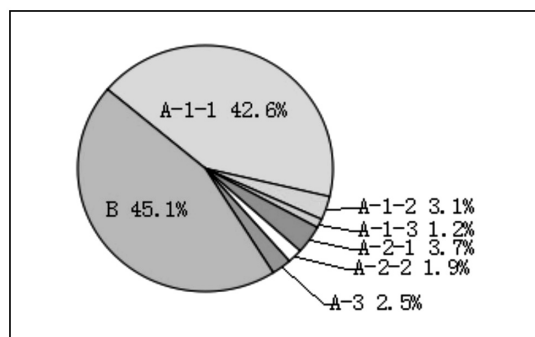
【図2】 話し言葉におけるハズダの意味用法の出現状況

ぎなかった。ここから、話し言葉では、「②納得」を表すワケダはほとんど使われていないということがわかる。【図2】からわかるように、「日常的」の場合は、「2 推論なし」(A2 と B2) のほうが多く出現している。特に「現実が未知で推論なし」(A2) の場合、A2 が44.2% を占めていることが目立つ。一方、「非日常的」の場合は「現実が未知で推論あり」(A1) が多く、特に「論文指導」においては8割を占めている。また、書き言葉に比して、「日常的」はA2 (44.6%) と B2 (28.1%)、つまり、「2 推論なし」の出現率が高いことが特徴的である。

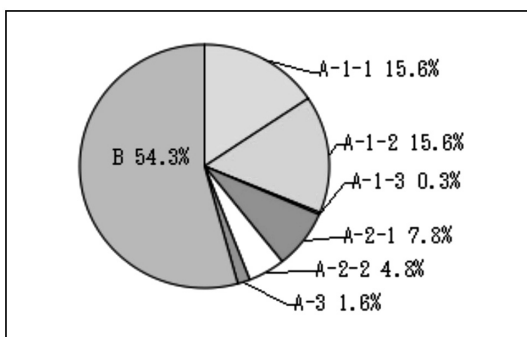
【図3】と【図4】のように、くだけた話し言葉と改まった話し言葉のいずれにおいても「B 事実の展開」が最も多く現れた。それ以外の用法に関しては、くだけた話し言葉では「A-1-1 予定の決定」が多く、改まった話し言葉では「A-1-1 予定の決定」に加えて「A-1-2 規則・決まりごと」も少なくない。また、これら以外の用法もある程度高い頻度で出現していることがわかる。

ワケダ・ハズダ・コトニナルが多く出現した話し言葉の種類に基づいて、異なる観点から三者の意味用法を整理して上記の図にまとめた。3節で三者の共通用法(ワケダ・ハズダ・コトニナルの帰結用法、ワケダ・ハズダの納得用法、ワケダ・コトニナルの言い換え用法)について理論の面から比較したが、以下は出現状況から比較し、検討してみよう。

(8) ワケダの「②納得」とハズダの「C1 納得」、(9) ワケダの「③言い換え」とコトニナルの「A



【図3】 くださった話し言葉におけるコトニナルの意味用法別の出現比率



【図4】 改まった話し言葉におけるコトニナルの意味用法別の出現比率

-2-2ある視点からの事態把握」用法については、3.2~3.3のように論理的に、その共通点と相違点を考えることができるが、いずれも出現率が極めて低く、ほとんど母語話者に用いられていないことが、上図からわかった。

(7) ワケダの「①a 結果」、ハズダの「現実が未知で推論あり」(A1)と「反事実の推論あり」(B1)、コトニナルの「A-2-1 論理的帰結」用法、つまり三者の帰結用法について、多く出現した「雑談」と「国会」における出現状況は次のとおりである。「雑談」(くださった話し言葉)では、ワケダが258例、ハズダが31例、コトニナルが6例出現している。「国会」(改まった話し言葉)ではワケダが98例、ハズダが203例、コトニナルが78例出現する。つまり、「雑談」のようなくだけた話し言葉において、コトニナルの帰結用法はワケダとハズダに比べても極めて少なく、ほとんど用いられていないということが言える。「国会」においては、ハズダはワケダ・コトニナルより出現数が少ないが、例(40)のような帰結用法(A1とB1)を表す例が7割近くを占めている。

(40) 青森港をつくるというと、西側の津軽半島に大きく浸食が見られます。ですから、こういう例は幾多あるわけです。ましてや、あの津軽海峡の遠浅の場所でもありますから、この影響はまた出てくるはずですよ。(国会会議録, 第98回国会, 1983)

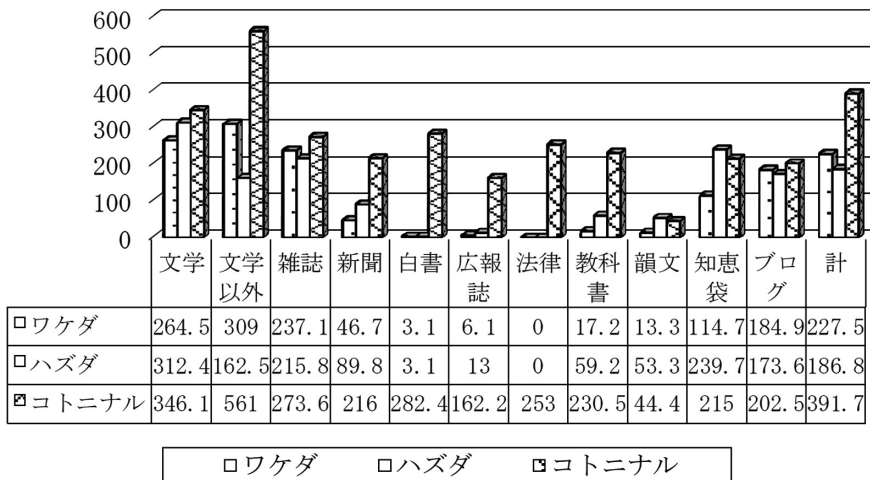
4.2 話し言葉におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの使用実態の相違について

次に、書き言葉についてである。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「国会会議録」以外の非コアを含む全データ(以下、BCCWJ)を調査対象とした。〈ジャンル〉別のワケダ・ハズダ・コトニナルの出現状況は次のとおりである。なお、各〈ジャンル〉の総語数が違うため、100万語単位での出現数を【表7】と【図5】に示す²。

² 本稿は小西(2011)を参考にし、得られた実例を11の〈ジャンル〉に分ける。〈ジャンル〉は基本的にはBCCWJにおけるレジスターに該当するが、「書籍」と「ベストセラー」は統合した上で「文学」と「文学以外」に分ける。

【表7】 BCCWJにおけるワケダ・ハズダ・コトニナルの〈ジャンル〉別の出現状況

分類	総語数	ワケダ		ハズダ		コトニナル	
		出現数	100万語単位での出現数	出現数	100万語単位での出現数	出現数	100万語単位での出現数
文学	20,139,268	5,326	264.5	6,291	312.4	6,970	346.1
文学以外	42,533,142	13,144	309.0	6,910	162.5	23,860	561.0
雑誌	4,444,492	1,054	237.1	959	215.8	1,216	273.6
新聞	1,370,233	64	46.7	123	89.8	296	216.0
白書	4,882,812	15	3.1	15	3.1	1,379	282.4
広報誌	3,755,161	23	6.1	49	13.0	609	162.2
法律	1,079,146	0	0.0	0	0.0	273	253.0
教科書	928,448	16	17.2	55	59.2	214	230.5
韻文	225,273	3	13.3	12	53.3	10	44.4
知恵袋	10,256,877	1,176	114.7	2,459	239.7	2,205	215.0
ブログ	10,194,143	1,885	184.9	1,770	173.6	2,064	202.5
総計	99,808,995	22,706	227.5	18,643	186.8	39,096	391.7



【図5】 ワケダ・ハズダ・コトニナルの〈ジャンル〉別の出現状況 (100万語単位)

【表7】と【図5】からわかるように、書き言葉の全体においてコトニナルが最も多く、総出現数はワケダの約1.7倍であり、ハズダの約2倍であり、話し言葉の出現状況と大きく異なっている。〈ジャンル〉別に見ると、ワケダ・ハズダに比して、コトニナルは「文学以外」「白書」「広報誌」「法律」「教科書」という五つの〈ジャンル〉において多く出現し、ワケダとハズダがほとんど出現していないのに対し、コトニナルの出現数が目立つ。それは〈ジャンル〉の特性に関連していると思われる。それぞれ一例を挙げる。

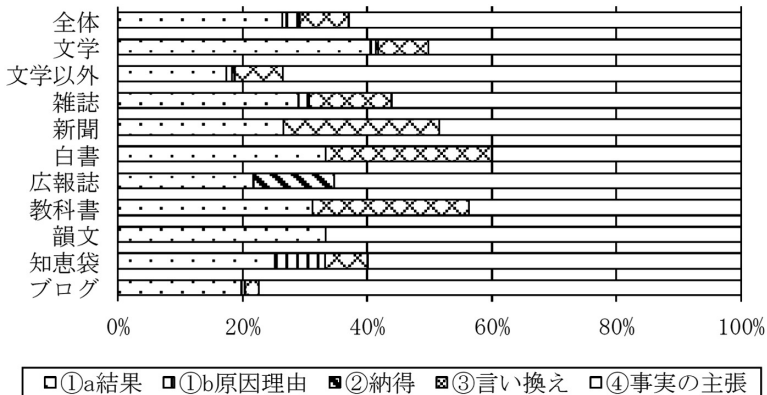
- (41) 原子炉の解体に係る規制等を一貫して内閣総理大臣（科学技術庁）が行うこととなっている。（白書，総理府原子力安全委員会『原子力安全白書』，平成5年版，大蔵省印刷局）
- (42) 昨年、関東地方を中心に十代から二十代の人の間で麻しん（はしか）の流行がありました。このため、麻しんの抗体が下がっている年代に対して、2回目の予防接種を受ける機会を設けることになりました。（広報誌，『広報ひかり』，2008年9月号，山口県光市）
- (43) 銀行持株会社又はその子会社が、国内の会社の議決権を合算してその基準議決権数を超えて保有することとなった場合には、その超える部分の議決権は、当該銀行持株会社が取得し、又は保有するものとみなす。（法律，『銀行法』，昭和五十六年六月一日法律第五十九号）
- (44) 地球は1日で1回転（=三百六十度）しているので、三百六十（度）÷二十四（時間）=十五（度）となり、経度十五度で1時間の時差が生じることになる。

（教科書，高橋彰他（著）『高等学校 新地理A 最新版』，2006，帝国書院）

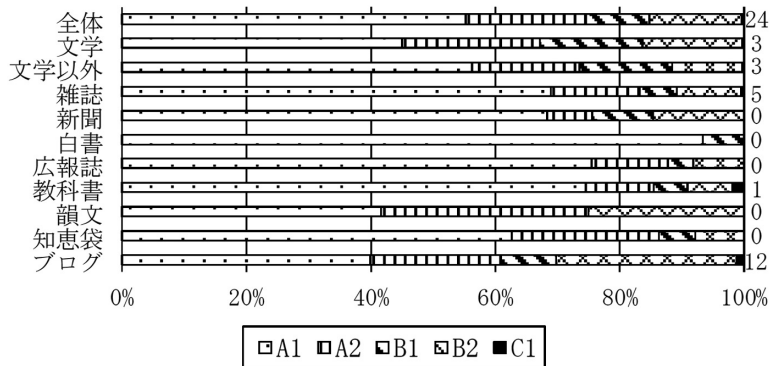
「白書」では（41）のような政府の施策についての現状分析と事後報告などに「A-1-2 規則・決まりごと」を表す「こととなっている」が多く用いられている。「広報誌」は（42）のような自治体が住民に向けて、自治体の決定したことや活動を紹介して宣伝するものが多い。また、「法律」では、99.1%の例が「こととなる」という形式で現れている。その中の多くは（43）のように、名詞を後接している。「教科書」は高校の社会（44例）と理科（25例）に用いられ、全体の3割以上を占めている。（44）のような論理的に推論し、原理や現象の要因を説明する例が多いため、「A-2-1 論理的帰結」用法の比率（約2割）がほかの〈ジャンル〉よりやや高い傾向が見られた。「白書」「広報誌」「法律」「教科書」のような〈ジャンル〉では、主観性が強いワケダ・ハズダより、客観的なコトニナルのほうが用いられやすい傾向が見られる。

また、〈ジャンル〉別・用法別の出現状況について、次の三つの図に提示する。

【図6】のように、全体を見れば、「④事実の主張」用法が最も多く用いられ、次は「①a 結果」用法である。そして、「①b 原因・理由」「②納得」「③言い換え」用法の総出現率は、10%もなく、極めて少ないことがわかる。

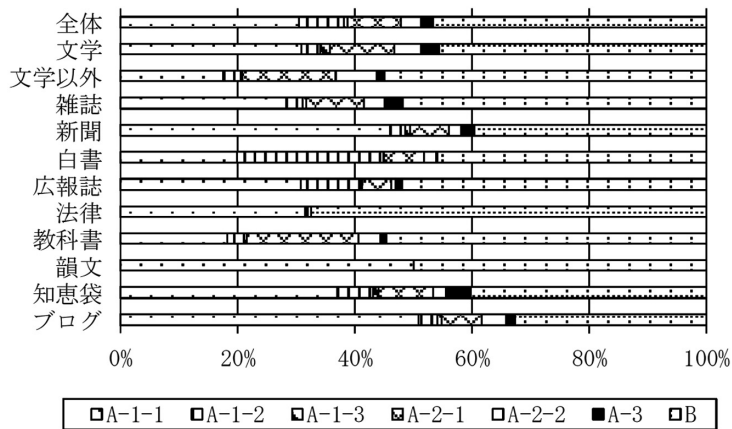


【図6】 BCCWJにおけるワケダの〈ジャンル〉別・用法別の出現状況



【図7】 BCCWJにおけるハズダの〈ジャンル〉別・用法別の出現状況

【図7】のように、全体においては、「現実が未知」の場合（A1とA2）の方が圧倒的に多く、約75%を占めている。推論があるかどうかという観点では、「推論あり」（A1、B1、C1）のほうが多く出現した（66%）。多く現れた意味用法の上位3つは、A1（55%）、A2（20%）とB2（14.8%）である。〈ジャンル〉ごとに見ていくと、「韻文」ではA1、A2、B2の3つの用法が集中的に現れ、かつ割合も平均的である点においてほかの〈ジャンル〉と異なっているが、用例数が少ないため本稿では特に詳しく検討することとしない。そのほか、「文学」「ブログ」では、A1以外の用法（A2、B1、B2、C1）が半分以上を占めており、ほかの〈ジャンル〉に比べてA1が少ないことが特徴的である。



【図8】 BCCWJにおけるコトニナルの〈ジャンル〉別・用法別の出現状況

【図8】のように、全体を見れば、「B 事実の展開」用法が半分程度を占めている。そして、〈ジャンル〉別に見ると、ほとんどの〈ジャンル〉において「B 事実の展開」が最も多く用いられているが、「ブログ」と「新聞」では「A-1-1 予定の決定」が最も多く現れている。それは〈ジャンル〉の性質に関連していると思われる。「ブログ」では個人的な体験や日記を記録するにあたり、決定さ

れたこと、あるいは個人的な意志で決めたことを婉曲的に表現しようとする場合にコトニナルで述べることが多いと思われる。「新聞」は事件や政治、経済、芸能の動向などのニュースを報じるメディアであるため、「A-1-1 予定の決定」を表すコトニナルが多用されていると考えられる。

ワケダ・ハズダに比べて、コトニナルは「白書」「広報誌」「法律」「教科書」という四つの〈ジャンル〉における出現数が目立つということは、〈ジャンル〉の特性に関連すると記述したが、コトニナルの意味用法にも関連していると思われる。【図8】からわかるように、「白書」「広報誌」「法律」「教科書」のいずれにおいても、「B 事実の展開」用法が60%以上を占めており、コトニナルの全体に比べても多い。下例のように、コトニナルがなくてもニュアンスがほとんど変わらないが、この用法はワケダもハズダも表すことができない。

- (45) 年金制度改革の必要性 こうした中で、もし年金制度を現在のまま維持するとすれば、高齢期の生活や現役世代の生活に大きな影響を与えることになる。

(白書, 厚生労働省 (監修) 『厚生労働白書』, 2004, ぎょうせい)

- (46) 公共下水道の接続は3年以内に 白鳥・御岳地区の^{ママ}図の区域は、十月1日から下水道への接続ができることになりました。

(広報誌, 『広報とうごう』, 2008年09号, 愛知県愛知郡東郷町)

また、話し言葉の「雑談」において、ハズダはワケダより圧倒的に少ないのに対して、上記の〈ジャンル〉のうち、最も話し言葉に近いと言われている「知恵袋」と「ブログ」においては、ワケダより多く出現していることが大変興味深い。太田(2014:88)がアンケート調査表に意見文の作文を設けているように、ハズダは意見文で現れやすいと言われている。例えば、(47)のように「知恵袋」で質問者の答えに対して自分自身の意見を述べる例と、「ブログ」で一方向的に感想や意見を語る例(48)がある。

- (47) 質問: 「3日間断食すると何キロくらい痩せますか?」

回答: ダイエットのために断食するのですか? ある程度標準体重の人であれば1~3キロだと思います。もしダイエットなら3日間断食より2日断食→3日目に1食→4日目断食→5日目に1食(1食の食べ物は量も種類も何を食べてもよい、また飲み物は毎日何を飲んでもよい) というような感じにすると痩せるはずです。

(Yahoo! 知恵袋, 2005)

- (48) ちなみに4月二十二日^{ママ}発売の有力シングルをあげると、東方神起「Share The World/ウィーアー!」「ウィーアー!」はアニメ・ワンピースの主題歌。この週の1位候補。前作はアルバムの関係もあり約7.4万枚にとどまったが、恐らく今回は初動で8~9万枚はだしてくるはず。

(Yahoo! ブログ, 2008)

(47) では質問に対して回答者が自分自身の意見を述べているが、断定ではなく、推論した結論をハズダで表す。論理的にはそのように推論できるが、現実がどうであるかは分からないという「責任回避」のニュアンスがやや感じられる。また、(48)のように、一方向的に個人の考えを述べる場合も

同じようなニュアンスが生じている。

以上のように、話し言葉と書き言葉における、ワケダ・ハズダ・コトニナルの使用実態を比較した。三者の相違点と共通点については、論理的に考えることができるが、コーパスの調査結果を用いて比較した結果、従来の先行研究で触れられていない使用実態や使用傾向が見られた。例えば、ワケダとハズダの納得用法について議論した先行研究が少なく区別しにくい用法であると思われる。しかし、実際どちらもほとんど母語話者に用いられていないことから、日本語教育現場では導入の優先順位が高くないということが言える。

また、ワケダ・ハズダ・コトニナルに関する先行研究は、ハズダが最も多く、昔から注目されている。しかし、使用数から見れば、話し言葉においてはワケダより圧倒的に少なく、書き言葉においてもコトニナル、ワケダより少ない。その点から考えると、研究実態が母語話者の使用実態と合致していない可能性がある。

5. 日本語教科書におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの扱いについて

本稿で扱った日本語教科書においては、3節で説明した①ワケダ・ハズダ・コトニナル三者に共通する結果を表す帰結用法や、②ワケダ・ハズダの納得用法、③ワケダ・コトニナルの言い換え用法について比較したものは見当たらない。そこで、文法書・教師用参考書を対象にして、調査してみる。調査したものは下記のとおりである。詳細は参考資料を参照されたい。

- ①『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（以下、『ハンドブック 初級』）
- ②『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（以下、『ハンドブック 中上級』）
- ③『初級日本語文法と教え方のポイント』（以下、『ポイント 初級』）
- ④『中級日本語文法と教え方のポイント』（以下、『ポイント 中級』）
- ⑤『“生きた” 例文で学ぶ日本語表現文型辞典』（以下、『生きた』）
- ⑥『新装版どんなときどう使う日本語表現文型辞典』（以下、『どんなとき』）
- ⑦『日本語文法演習まとまりを作る表現—指示詞、接続詞、のだ・わけだ・からだ』（以下、『まとまり』）
- ⑧『外国人のための日本語 例文・問題シリーズ 形式名詞』（以下、『形式名詞』）
- ⑨『日本語文型辞典』（以下、『文型』）
- ⑩『日本語類義表現使い分け辞典』（以下、『類義』）

上記の十種の文法書・教師用参考書のうち、ワケダ・ハズダ・コトニナルを比較している内容が見られたのは五種あり、【表8】にまとめる。帰結用法、納得用法、言い換え用法の三種とも表せるワケダを基準に、ワケダと比較しているものには、○を付けた。

帰結用法と納得用法に関しては、比較しているものがそれぞれ三種見られたが、ワケダとコトニナルの言い換え用法を比較したものは見当たらない。それは、ほとんどすべての場合において置き換えられるからだと考えられる。2節で検討したように、ニュアンスが少し異なる場合も考えられるが、

【表8】 文法書・教師用参考書におけるワケダ・ハズダ・コトニナルの比較状況

本の名前	帰結用法		納得用法 (ハズダ)	言い換え用法 (コトニナル)
	ハズダ	コトニナル		
『ハンドブック 中級』		○	○	
『ポイント 中級』	○			
『まとめり』		○	○	
『形式名詞』	○	○		
『類義』	○		○	

ワケダもコトニナルも、言い換え用法はほとんど日本語母語話者に用いられておらず、かつ非常に細かなニュアンスの違いであるため、日本語教育では積極的に説明しなくてもいいだろう。ただし、文法書・教師用参考書の使用者（日本語教師、上級・超級学習者等）を考えると、詳しく説明する必要性も考えられる。

次に、【表8】でまとめた文法書・教師用参考書における説明の仕方を検討してみよう。主に次のように説明されている（太文字は筆者による強調）。

- (49) 「ことになる」と「わけだ」を比べると、「ことになる」の方がより客観的表現であり、報道文などでよく使われます。（『まとめり』, p. 61）
- (50) 「～はずだ」は話し手がある根拠にもとづいて当然こうなるという確信（期待）を表します。「～わけだ」は、ことの成り行きやものの道理などから必然的にそのような結論に達したということを表します。

～はずだ		
根拠	→	判断（確信（期待））
会議がある。	（であれば）	社長が来るはずだ。
～わけだ		
根拠	→	判断（論理的・自然的帰結）
会議がある。	（だから）	社長が来るわけだ。

（『ポイント 中上級』, pp. 165-166）

- (51) 「納得」の場合、ワケダは「～だから当然だ」と「納得／断言」している。ハズダは「～なら当然だろう」と「納得／状況判断／推論」している。「推論」の場合、「A+はずだ」の場合、Aは〈話し手／聞き手〉の状況ではなく、第三者の状況か、第三者と見なした〈話し手／聞き手〉の状況である。「A+わけだ」は「断言」なので、話し手は自分自身の状況を含めて、自分をとりまく状況Aのすべてを判断することができる。（『類義』, pp. 1105-1106）
- 簡単にまとめると、ワケダに比べてコトニナルは客観的な表現であると説明されている。そして、ワケダとハズダの帰結用法を比較する場合、ワケダが断定する表現であるが、ハズダは確信を表す表

現であるとされている。すなわち、今回調査した文法書・教師用参考書は先行研究の主張を反映していると言える。先行研究の主張をまとめた横田(2002)を引用すると、次のとおりである。

- (52) ワケダとコトニナルは論理的帰結を少なくとも論理上は既定の事実であるとして断定しているのに対して、ハズダは論理的帰結を高い確信をもって推論しているだけで事実としては捉えていない点に異なっている。
- (53) ワケダは帰結の必然性を主観的に断定する表現、ハズダは帰結の必然性を推論する主観的表現、コトニナルは帰結の必然性を客観的に述べる表現である。

そのほか、納得用法を表すワケダとハズダについて、(51)の説明のほか、『ハンドブック 中上級』『まとまり』では「どうりで～わけだ」で納得用法を表す場合、ハズダに置き換えられるという記述にとどまり、それより詳しい説明はされていない。それは、納得用法を表すワケダとハズダの相違が紛らわしく、簡単に説明できないからだと考えられる。その意味では、学習者には両者が置き換えられるという程度の説明でよいが、文法書・教師用参考書では両者の相違を詳しく説明したほうがいいだろう。一方、4節でも説明したように、ワケダとハズダの納得用法は実際にはほとんど母語話者に用いられていないため、日本語教育では優先順位が高くないと言える。

以上のように、文法書・教師用参考書を調査した結果、ワケダとコトニナルの言い換え用法を比較しているものは見当たらず、ワケダとハズダの納得用法についても簡単に触れられているのみである。また、三者の帰結用法については、先行研究の主張を踏襲している傾向が見られた。

6. おわりに

本稿では、体系的性が低いと思われるワケダ・ハズダ・コトニナルを「意味用法」「使用実態」「日本語教科書における扱い」という多角的な観点を通じて、三者の相違について分析と考察を行った。その結果、3節のように論理的に三者を比較することができるが、4節でまとめたように使用実態から考えると、ワケダとコトニナルの言い換え用法、ワケダとハズダの納得用法は使用率が低いため、日本語教育で積極的に導入しなくてもいい。ただし、上級学習者、ニア・ネイティブレベルを目指す学習者や日本語教師のための日本語文法書・日本語教師用参考書では、相違点と共通点を詳しく説明した上で、使用実態も紹介することが望ましいだろう。

参考文献

- 安達太郎(1997)『「なる」による変化構文の意味と用法』『広島女子大学国際文化学部紀要』4、pp. 71-84
- 泉原省二(2007)『日本語類義表現使い分け辞典』研究社
- 市川保子(1991)「従属節と『にちがいない』『はずだ』『べきだ』『わけだ』：上級レベルの学生の誤用を通して」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』(6)、pp. 19-33
- 太田陽子(2014)『文脈をえがく：運用力につながる文法記述の理念と方法』ココ出版
- 岡部嘉幸(1998)「ハズダの用法について」東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会編『東京

- 大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』、pp. 947-960、汲古書院
- 小西円 (2011) 「使用傾向を記述する一伝聞の [ソウダ] を例に一」 森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』、pp. 159-187、ひつじ書房
- 鈴木義和 (2017) 「「P ことになる」型の文について」『国文論叢』52、pp. 1-16、神戸大学文学部国語国文学会
- 陳秀茵 (2017) 「『わけだ』の使用実態—BCCWJ の例を用いて」『国文論叢』52、pp. 34-52、神戸大学文学部国語国文学会
- 陳秀茵 (2018) 「書き言葉におけるコトニナルの使用実態調査と分析—日本語教育への示唆」『日本語／日本語教育研究』9、pp. 119-134
- 陳秀茵 (2021) 「ハズダの意味用法と使用実態について」『国文論叢 鈴木義和ご退職記念』58、pp. 142-161、神戸大学文学部国語国文学会
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク
- 横田淳子 (2001) 「文末表現「わけだ」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』27、pp. 49-64
- 横田淳子 (2002) 「文末表現「わけだ」の用法—「はずだ」「ことになる」との比較」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28、pp. 13-26
- 劉向東 (1996) 「『わけだ』文に関する一考察」『日本語教育』88、pp. 48-60、日本語教育学会

参考資料：文法書・教師用参考書

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク／庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク／庵功雄・三枝令子 (2013) 『日本語文法演習 まとまりを作る表現—指示詞、接続詞、のだ・わけだ・からだ』スリーエーネットワーク／泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』研究社／アスク出版編集部 (2008) 『“生きた” 例文で学ぶ 日本語表現文型辞典』／市川保子 (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク／市川保子 (2007) 『中級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク／グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版／友松悦子・和栗雅子・宮本淳 (2010) 『新装版どなたときどう使う日本語表現文型辞典』アルク出版

本研究は、2021年度東洋大学井上円了記念研究助成事業「日本語教育のための形式名詞由来の文末表現研究—変化を表すコトニナル・コトニスル・ヨウニナル・ヨウニスルを中心に—」(代表者：陳秀茵)による成果の一部である。

【Abstract】

A Comparison of the Japanese Auxillary Verbs *Wake Da*, *Hazu Da*,
and *Koto Ni Naru*

CHEN Xiuyin*

This article considers the use of *wake da*, *hazu da*, and *koto ni naru* from multiple perspectives for advanced level Japanese learners. In Japanese language education, generally these three phrases are introduced at the beginner-intermediate stage, and subsequently they are difficult for most JSOL learners. Using the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese Corpus, Nagoya University Conversation Corpus, BTSJ Natural Conversation Corpus, and ten types Japanese textbooks for JSOL learners, the differences between these three grammatical forms is analyzed. As a result, it is possible to logically compare these three terms, but considering their actual usage, specifically the very low rate at which *wake da* is used as a paraphrase of *koto ni naru* or *wake da* is used as a paraphrase of *hazu da*, it does not seem necessary to actively introduce them in JSOL education contexts. In addition, in Japanese grammar and reference books for Japanese language teachers or advanced learners, the differences and commonalities are explained in detail, therefore the actual usage should be introduced only for those aspiring for a C2 Japanese proficiency level or higher.

Key words : *Wake da*, *Hazu da*, *Koto ni naru*, JSOL education, Japanese language corpus studies

本稿は上級レベル学習者、特にニア・ネイティブレベルを目指す日本語学習者のための記述を目指し、「帰結用法を表す形式名詞由来の文末表現」という視点からワケダ・ハズダ・コトニナルを捉え直し、多角的な観点より考察と分析を行ったものである。日本語教育において、ワケダ・ハズダ・コトニナルはいずれも初中級段階で導入されるが、日本語学習者にとって難しい文法項目とされている。本稿では、コーパス調査と教科書調査を用いて、「意味用法」「使用実態」「日本語教科書における扱い」という多角的な観点より、三者の相違について分析と考察を行った。その結果、1) 論理的に三者を比較することはできるが、2) 使用実態から見ると、ワケダとコトニナルの言い換え用法、ワケダとハズダの納得用法は使用率が非常に低いため、日本語教育で積極的に導入する必要性が低い。3) なお、上級学習者、ニア・ネイティブレベルを目指す学習者や日本語教師のための日本語文法書・日本語教師用参考書では、相違点と共通点を詳しく説明した上で、使用実態も紹介することが望ましい。

キーワード：わけだ、はずだ、ことになる、日本語教育、コーパス

* A lecturer in the Center for Global Education and Exchange, and a reasearch fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University